

「平成 33 年度大学入学者選抜実施要項の見直しに係る予告」(文部科学省高等教育局長、平成 29 年 7 月 13 日付け通知)¹の I の 2 の (1) の「一般入試の改善」のまる 3 に、「各大学は、受検生に英語の試験を課す場合、4 技能を総合的に評価するよう努める。」と書かれている。この文言が 2021 年度の大学入学者選抜実施要項に盛り込まれることが予告されているわけである。

英語民間検定試験の成績を入試に用いられれば、認定されている検定試験では 4 技能が測られることになっているから、入試で 4 技能を測ったことになるらしい。民間検定試験を使わないことにすれば、「4 技能を総合的に評価」していないように見える。この点について説明を求められる可能性がある。以下はその説明である。

英語学習で 4 つの技能が全て重要なのは言うまでもない。しかし、それらは一体のものである。そして、大学入試で 4 つを個別に計測することは必須ではない。入試には技術的制約がある。無理にやろうとすると弊害が起こる。

話す能力というのは、聞いて理解し、話す内容を考え、文を作り、文章を作り、発話して、相手の反応を見るということの繰り返しからなるが、そのうち、スピーキングテストをやると測れて、それをやらないと測れないのは発話部分だけである。

福井県立大学の個別学力検査での英語は読ませて書かせている。大学入学共通テスト(旧センター試験)と合わせて、本学入試は、「読み」、「聞き」、「書く」能力を総合的に測っている。そして書く試験で話す能力の相当部分を測っている。要するに、4 技能のほとんどを総合的に測っている。

発話実技試験だけを欠く英語試験をすることによって取りこぼすかもしれないのは、構文がむちゃくちゃで語彙の知識もないが、きれいな発音で流暢に話すというような人であろう。そのような取りこぼしをなくすことが、費用もかからず弊害もなくできるのであれば、行うであろう。個別学力検査で発話実技試験を行うのは費用がかかりすぎて不可能である。だからといって民間検定試験の結果を使うと弊害が大きい。弊害とは、入試の学力検査の他の部分に求められているのと同程度の公平性を確保して利用する方法がないということである(後述)。

他方、そのような取りこぼしをなくすことによって得られる便益はあまりにも小さい。「読み」、「聞き」、「書く」試験で高い総合点を取った人なら、大学での教育によって話す能力はいくらでも高められるだろう。

そもそも高校教育で行われるべき内容のすべてを大学入試で測らなければならないということはない。国語では話すことについて指導されるが、大学入試では日本語を話す試験をしない。

大学入試で測られなくても、高校教育でやるべきことはやらなければならない。大学入試は、高校で身につけるべきとされている学力のうち、大学で必要で、かつ測ることが比較的容易で、測れない部分をも代表するような部分を測るのである。

2021 年度大学入試実施要項に盛り込まれる上記の文の文末は「ものとする」ではなく「よう努める」である。それについて説明を求められた時の形式的な答えは「努めたが諸々の弊害があるので実施しない」である。

() 民間英語検定試験の成績を入試で公平に使うことができないこと

異なる試験の点数を共通の尺度に換算して点数化する信頼できる方法を我々は持っていない。

- 文部科学省が発表した「大学入学共通テスト実施方針」(2017 年 7 月 13 日)²の 7 に、「国は、活用の参考となるよう、CEFR の段階別成績表示による対照表を提示する。」と書かれているが、これまでに

¹ http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/koudai/detail/1397731.htm

² 同上。

されている「各資格・検定試験と CEFR との対照表」³は、各資格・検定試験の実施団体が勝手に自らの試験の点数を CEFR の段階に対応付けたのを並べただけで、文部科学省が検証したものではない。国はまだ国が作成した対照表を提示していない。

- 各資格・検定試験の実施団体の対応付けの方法に我々は疑問を持っている。

－ 例えば、英検では⁴、大学で3年以上英語を教えた経験があり英検に何らかの関わりのある13人の英語教師をパネルとして、まず CEFR について勉強してもらった上で、英検の1級の1次試験の語彙、読み、聴き取りの問題について、CEFR の C1 に相当する能力のある人だったら100人中何人が正解を出すかを答えてもらう。その結果は、語彙、読みが58人、聴き取りが62人だった。他方、英検は7割できないと合格しないから、英検1級に合格した人は十分 C1 に相当する。よって、英検1級にぎりぎり合格する人は C1 と B2 の境界の人と見なされた。同様に、英検準1級にぎりぎり合格する人が B2 と B1 との境界の人と見なされた。B1 以下についてはどうやって決めたか何も書かれていない。

しかし、パネルは、C1 の英語力をもつ人々の英検1級問題の正答率が6割程度だと言っているわけで、他方、現に英検1級に合格した人は最低でも7割の正答率を持っているのだから、英検1級にぎりぎり合格した人は、C1 と B2 との境ではなく、悠々 C1 の中にいることになり、英検1級に合格しなかった人の中に C1 と B2 のちょうど境目にいる人がいるであろう。

2018年3月の対照表は2017年7月の対照表とは異なるが、どうして変わったかについて明らかにされていない。

－ また、GTEC は、読みと聴き取りについては、欧州評議会のマニュアル⁵にある「ブックマーク法」を使って、試験の点数と CEFR の段階との関係付を行った⁶。ブックマーク法は、パネルメンバー(GTEC の調査では、「CEFR および英語の言語教育、教育測定に精通した研究者6名」⁷) が、試験の問題を抽出して、易しい方から順に並べ、CEFR の段階の境界—例えば A1 と A2 との境界—に当たるところを決める。例えば、第10問までは A1 がマスターしておくべき問題だが、第11問はそうではなく、A2 段階でマスターしておくべき問題だということをパネルが決める。次に、マスターしていたら「高い確率」で正答すると考える。「高い確率」とは、1/2 とか 2/3 とか 3/4 とかである。どれにするかはマニュアルでは特定化されていないから、これもパネルが決める。GTEC では1/2とした。そして、GTEC で何点以上のグループなら、第11問が1/2以上の確率で正答かを見る。読みについてはそれが150点だった。だから、A1 と A2 との境界得点は150点である。これを A2 と B1 との境界等々についてやり、聴き取りについてもやる。書くことの試験については、答案をテストスコアの低い順に並べ、パネルメンバーが答案を見て、A1 と A2 との境界に位置する答案を特定するというやり方でスコアと CEFR 段階とを関連付けた。

しかし、「高い確率」を1/2とするか2/3とするか3/4とするかで結果は当然変わる。そしてどれを選ぶかは全く恣意的である。

2018年3月の対照表は2017年7月の対照表とは異なるが、どうして変わったかについて明らかにされていない。

－ このように、実施団体によって CEFR 段階との対応付けの方法が異なる。

³ http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/03/1402610.htm.

⁴ Dunlea, J. and Matsudaira, T. (2009), 'Investigating the relationship between the EIKEN Tests and the CEFR', Neus Figueras and Jos'e Noijons (eds.), *Linking to the CEFR levels: Research perspectives*, Cito, Institute for Educational Measurement, Council of Europe, European Association for Language Testing and Assessment (EALTA), pp.103-108.

⁵ Council of Europe (2009), *Relating Language Examinations to the Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment (CEFR): A Manual*.

⁶ 根岸雅史、投野由紀夫、鹿島田優子、岡部康子 (2017) 「GTEC と CEFR レベル関連付け調査」2017年3月31日 http://cees.or.jp/pdf/reports/2017/GTEC-CEFR_Report.pdf. 根岸雅史他 (2017) 『GTEC スコアと CEFR レベル関連付け調査報告』2017年9月 <https://cees.or.jp/act/report.html>.

⁷ 同上。